



Rotary International District 2800 山形西ロータリークラブ会報

会長：長澤 裕二 幹事：三沢 大介

世界に希望を生み出そう

地区目標 ロータリーを語ろう そして ロータリーを楽しもう

クラブテーマ 新会員を育てながら、ロータリーを楽しもう

◆点鐘：長澤 裕二 会長 ◆ロータリーソング：四つのテスト
◆司会：高橋 昌之 S.A.A. ◆会場：山形グランドホテル



第3004回例会 令和6年1月29日(月)

会長あいさつ

長澤 裕二 会長



本日、この例会の前に臨時理事会を開きました。そこで話しましたが、能登地震の義援金がガバナー事務所のほうから要請されています。1人3,000円目標で、この会から30万円ということで要請を受けています。

もう一方、これは私の気持ちとして、金沢西ロータリークラブという

われわれの友好クラブがあり、そこになんとかお見舞金を出せないかということで、その両方を含めて審議いたしました。パストガバナーからのご意見もいただいて、お見舞金は当然すべきだろうと。それで、私の気持ちとしてもすぐ送りたいということで、ガバナーの事務所から要請が来ている30万円とお見舞金20万円を合わせて50万円、なんとかこのクラブから送ろうじゃないかということを経理会で承認いただきました。こんな地震が起こるなんていうことは全然考えていなかったの、ぜひ皆さんからご協力いただいて寄付を募りたいと、それでなんとか50万円集めたいと、なんとか皆さんにご協力をお願いしたいと思います。

東北の地震も大変で、復興に10年かかったと思います。能登も時間がかかると思うのです。なんとか皆さんからも、ぜひご協力いただいて、お見舞金を送りたいと思っていますので、今日からぜひご協力をお願いします。

あと、今日は監督が来ていますので、少し映画の話をしたいと思います。理事長をやりながら映画を作るのはやっぱり大変だと思います。理事長のうちは映画を作るなんてできないと思っていましたが、1本作ったんですね。もともと監督で、やっている間に学長に推挙され、務めあげ、今度は理事長ということで、大学の事務方の最高責任者です。それをやりながら、なおかつ、映画監督だから映画を作るということで、作りました。それは来年公開されます。自分の仕事をきちんとやっている人なのです。

私も映画は毎日観ていますし、最近アカデミー賞に日本映画が3本ノミネートされて、昨日、『ゴジラ-1.0』をもう一度観ました。ゴジラがアカデミー賞にノミネートされたのです。今回のゴジラは、観てみるとちょっと違うんですよ。ちょっとおもしろいです。観ていない人はぜひ観てください。こんなふうにゴジラにスポットが当たるとは思っていませんでしたが、でも、本当に予想以上に変な映画です。絶対裏切られて、でもそれは嬉しい裏切られ方ですから、観ていない方はぜひ観ていただければと思います。

幹事報告

三沢 大介 幹事

- 本日、米山奨学生のチャンビンさんと米山学友会のデン・ウデンさんが来ています。会長から奨学金の贈呈をお願いいたします。
- 能登半島地震の募金箱を作らせていただいております。今日と来週の例会の食事の際に各テーブルに回させていただきますので、皆さまからのご協力をお願いいたします。また、例会に来られない会員の方もいますので、後ほど事務局のほうから全会員のほうに「募金のお願い」ということで案内を出させていただきます。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

ニコニコBOX

〈1月29日〉

長澤裕二会長／根岸監督をお迎えして

本日のゲストにお迎えした根岸吉太郎監督は東北芸工大の映画学科長として山形に迎えられ、次に学長になられ、ついに芸工大の理事長を務めておられます。2000回記念例会以来の西ロータリークラブによろこばいしました。

中山眞一さん／日頃何かとお世話になっております根岸理事長のご来訪を歓迎し、ニコニコいたします。

富田浩志さん／ありがとうございます

お忙しい中、卓話の件、ありがとうございます。

戸田正宏さんをはじめとする白鷹山グループの皆さん

白鷹山が4連敗のあと驚異の9連勝。結果、10勝5敗で初場所を終了しました。来場所が楽しみとなりました。

五十嵐信さん／姉が『AERA』で取り上げてもらいました先週発売の『AERA』の67ページの「この人この本」で姉を取り上げてもらいました。ようやく作家として認められたみたいでありがたく思っております。

鈴木隆一さん／特別功労大賞受賞

このたび、東北ニュービジネス協議会より、特別功労大賞を受賞しました。賞の名を汚さぬよう、一生精進してまいりますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

※なお、1月22日の例会会報にて、遠藤靖彦さんのニコニコが掲載されていませんでした。こちらで、紹介させていただきます。大変失礼いたしました。

遠藤靖彦さん／ようこそ、吉澤委員長

大学、JCを通し、先輩風をふかし申し訳ありません。本日はお忙しい中山形西ロータリーによろこそ。

奨学生からのひとこと

○チャンピン奨学生よりひとこと

皆さん、こんにちは。1月の近況報告をさせていただきます。2つあります。まず1つ目は、横沢さんの家で食事会がありました。横沢さんが食事会に招待してくださって、夜ご飯をおうちで食べたのですが、メニューはお寿司とキムチ鍋とかがあって、とてもおいしかったです。それでこの場をお借りして御礼を申し上げたいと思いました。あと、その食事会が終わったあとは奥さんから手作りのキムチをいただいて、間違いのない本場の味で、とてもおいしかったです。2つ目は、米山奨学生が集まる新年会がありました。いつも米山奨学生に対して西クラブの芦野さんがお気遣いしてくださって、またこの場をお借りして御礼を申し上げたいと思いました。ありがとうございました。



○デン・ウデン米山学友会奨学生よりひとこと

本日はお昼の例会に参加させていただき、誠にありがとうございます。近況報告については、2つあります。1つは、修士論文のほうは今月中に完成させ、学校のほうに提出いたしました。本日、1部コピーしてお持ちしたので、ご興味のある方ももしいらっしゃれば、少しでも目を通していただければと思います。2つ目は、就職活動についてです。現在、鶴岡のほうに住んでいるのですが、就職のほうも鶴岡に決まり、庄交コーポレーションという会社のトラベル事業部に配属されることになりました。今年の4月から社会人としてデビューさせていただきます。あっという間の1年間で、山形西ロータリークラブにお世話になるのは残り1回だと思うんですけど、最終例会で最終ご挨拶を申し上げたいと思います。今回は学生として最後の例会だと思います。皆さんとずっとご縁を持ち、ずっとお付き合いいただければいいなと思っています。どうもありがとうございました。



ゲスト卓話



今までの30年、これからの30年

根岸 吉太郎 さん

[東北芸術工科大学 理事長]

皆さんこんにちは。ご紹介にあずかりました、東北芸術工科大学の理事長、根岸でございます。お招きいただいてこのような場を与えていただいたこと、感謝申し上げます。

私は映画監督で元々は映画を撮り続けていたんですけれども、2007年に大学が映像学科を新設することになり、その学科長として大学に迎え入れられました。そしてその2年後に学長に推挙され、7年半学長を務めておりましたが、古澤前理事長が、ちょっと体調が思わしくないというお話で「理事長を引き継ぐように」というご指示があったので、理事会の決議を経て理事長となり、今日に至っております。

学長になった時に、前学長の松本先生という日本画の先生ですけれども「学長なんて役職になると映画撮れなくなるぞ」と言われましたけれども、いつも帰りの新幹線でビールを買い占めてずっと飲んでらっしゃる松本先生を見ていたものですから、この人が学長をしていながら立派な絵を描いているということを見ると、大丈夫なんじゃないかなと思ってお引き受けしましたが、やはりなかなか面倒な仕事で、映画どころではなく月日が流れて、やっとさっき長澤さんにご紹介していただきましたけれども、16年前に『ヴィヨンの妻』という映画を撮って、モントリオールで監督賞をいただいたんですけれども、それ以来16年ぶりに去年新作を撮影しました。来年の春にたぶん公開になると思うので、その折には皆さんぜひともよろしく願いたいと思います。フォーラムにぜひお越しください。

さて本日は「今までの30年、これからの30年」というタイトルでお話させていただきます。東北芸術工科大学が昨年創立30周年を迎えて、その間に1万人以上の卒業生を輩出し、東北・山形の地に、ある一定の貢献ができたというふうに自負しております。この30年を振り返り、山形と東北芸術工科大学のこれからの未来を考えることが今こそ必要とされていると思って、この場をお借りしてお話をしている次第です。

実はこの度、大学の歴史と地域のかかわりをこのような書籍として作りまして『ローカルが生んだクリエイティブ大学 東北芸術工科大学30年の軌跡』という本なんですけれども、2月6日に出版されます。まだこれきちっと出来上がってなくて、ダミーなんですけれども、山形の書店や2月6日から始まる大学の卒展の会場で販売する予定ですので、お買い求めいただければ幸いです。

まずこの本に従ってということもありませんけれども、この30年を振り返りますが、東北芸術工科大学は皆さんご存じのように公設民営の大学であり、山形県民、市民の皆さんの強い要望と用地や建設資金の提供によってスタートしました。私たちはそのことを一瞬たりとも忘れたことはありませんが、経営や教育に関してはあくまでも私立大学として行政に頼らず自立して歩んでまいろうと思っています。そうしたことが私たちの責任であり、その気概なしにはこの少子化の困難な時代に大学は生き残れないと思っています。芸工大は一度も定員割れをせずにやってきまし

た。これは自慢できることだと思いますけれども、今全国の私立大学の実に53%が定員割れをしています。深刻な状況です。公設民営の大学の多くが志願者の激減によって自治体に頼って公立への転換をしています。当然のことながら、地方自治体の財政負担は増え、地方交付税に頼る経営は税制の変化によっては地方自治体の負担がもっと増えるというリスクがあります。加計学園の問題などもまさにこのような図式の中にあって、私どもはこれとは全く逆の道を歩んでいくつもりです。財政面でも収支差額を右肩上がりに上昇させていて、将来の施設投資に備えるべく歩みが続けています。

この本の中で自分も知らなかったことがいくつか著述されています。1つは五十数年前、1968年ですけれども、東北経済連合会が国の全国総合開発計画に対して国際研究学園都市の構想を進めるべきだとして、1970年に協議会が発足しました。メンバーは東北経済連合会、宮城県、山形県、仙台市、山形市、東北大学及び山形大学でした。協議会では仙台と山形の2つの都市圏を結び広大な地域に、国際研究学園都市を作る構想が打ち出され、1972年3月にマスタープランが策定されました。このマスタープランは奥羽山脈を挟んで、宮城県側は国際学園大学や研究を設置し、山形県側は芸術系大学を設置するというものでした。

その後1970年後半から山形経済同友会を中心に工学系大学の誘致を検討し、その皆さまの熱意が東北芸術工科大学設立の発端となったことは存じ上げています。ただ今思うと、偶然にも五十数年前に芸術系になることがこの山形に期待されていたということは、どこかで今日につながっているのではないかなと思いました。

もう1つ自分が好きなエピソードは、大学のキャンパスがいつもきれいだという事なんですね。清掃は非常に丁寧です。驚くほど清潔を保っています。これらの清掃や除雪、除草など施設の管理をおこなっているのは、東北環境総合サービスという会社です。これは上桜田、中桜田の大学用地を提供してくれた地権者の皆さんが設立したものです。元々自分たちの土地であったところに建てた大学を毎日きれいに保ってくれています。土地を譲った人と大学とのこのような関係はまれに見るものではないでしょうか。土地を愛する気持ちを私たちと分け合ってくれていることに感動しつつも感謝し、この関係が大学と地域の結びつきをより強固なものにしています。

1992年に芸術学部とデザイン工学部の2つの学部で大学がスタートしました。デザインという言葉が入った学部は芸術工科大学が日本で初めてです。スタート時のコンセプトは驚くほど先端的で、今でも次の教育を考える上で大きなヒントとなります。

当時マイクロソフト、ウィンドウズ95の登場前で、一般家庭のパソコン活用はワープロソフト止まり。このような時期にスタッフはペイントソフト、アニメーションソフトなどを活用したカリキュラムの開発に議論を続けて、コンピューターを必修科目としました。その内容はもちろん基礎知識から始まり、デザイン、高度なアプリケーションのソフトの活用、プログラミング能力としました。コンピューター室3室を設けて、各教室に学生用36台、教員用1台、合計111台のアップルコンピューターを配置して、すべてが24ビットモニターに接続しました。当時のアップルコンピューターは非常に高価なものです。これらの教室の投資額は億単位のもので、これらの取り組みを経て学生が制作したグラフィックデザインやアニメーション作品が各種コンテストで受賞することにつながりました。

こうした環境の中で入学した初期の学生たち、今、それ

ぞれもう50歳前後だと思いますけれども、それぞれの社会で中心となって活躍するようになり、また、大学に教員となって戻ってきて後進の指導をするという好循環になっています。

当初、大学は、初代の芳賀学長が「ものをかたち作る人間の教育」と唱えたように、形あるものをクリエイティブできる能力を重点に置いていたと思いますが、その中でデザインというものをもっと広い意味で考えていこうとしたのがデザイン思考であり、今につながるデザイン選手権、「デザセン」です。これは全国の高校のチームに応募してもらって、大学が開催しているのですけれども、社会の問題や課題を発見してもらい、解決策を提示してもらうという選手権です。2006年にはグッドデザイン賞を受賞しました。新しいデザイン教育と人材育成のモデルというのが授賞理由です。

アイディアのいくつかは実際に具現化され、例えば2011年の札幌平岸高校の『ネガティブ辞典』。ネガティブな言葉をポジティブな言葉に変換して楽しくコミュニケーションする社会を作るというアイディアですが、携帯アプリを通して14万回ダウンロードされ、主婦の友社で書籍にもなりました。現在も決勝の会場はニコニコ動画で中継されて、多数の視聴者に見られております。

デザインという言葉が単にモノの形やグラフィックということではなくて、問題や課題を発見して知恵や工夫で解決していき、そのプロトタイプを作り、それをテスト・検証していくという、これを今デザイン思考といったもので、皆さんもうご存じでしょうけれども、これを全面的に押し出したものです。これが課題解決という総合学習や探究学習といった今日の小中高の教育の発端となっているのではないかと思います。東根にある東桜学館の総合学習、未来創造プロジェクトのカリキュラムも、芸工大教員が共同で開発して、その実績から複数の高校に探求科が新設され、実験的な学びの場が広がっています。本学からも高校での新しい探究学習の取り組み支援で、山形東高、西高、北高をはじめとしていくつかの県内高校と連携しているところ です。

この30年を振り返った時、この地に起きたもっとも大きな出来事は、やはり2011年の東日本大震災でした。幸い大学の被害は軽微でしたが、学生の安否確認や卒業前の学生の移動の時期で大変混乱し、また、交通は遮断されており、卒業式は延期となりました。その中でこの大災害を前に、芸術とデザインの大学として、こういった事態に何ができるのかと私たちは問いかけられました。私たちだけではなく、芸術家、デザイナー、あらゆるクリエイターが同じように問いかけられたのだと思います。芸術はこのような事態には無力ではないのか、何ができるのかと問われた時に、答えは、「芸術は、デザインは人の幸せのためにあるんだ。芸術魂を持って世界を平和に導く」という大学の理念を振り返った時に生まれたのが、「復興会議」という山形大学との共同プロジェクトでした。「スマイルエンジン」と名付けられたバスを運行することによって、毎週石巻方面に通いながら、1,840人の学生、教職員が被災地に対するボランティア活動を続けました。私も先頭に立って石巻に通いました。このようなプロジェクトを生み出すことが課題を解決するデザイン思考の形の1つではないかと思います。こうした体験の中から地域と大学の結びつきを見直すとうか、もっと深い絆で結ばれ活動していくべきではないかとの思いが強まっていったのだと思います。東北全体の大学とそれに伴う危機的な状況から、在学生の授業料免除、減免を行いました。また、先の見えない東北の状況を考え、復興の足掛かりとして、スケールメリット

の観点から、京都芸術大学、瓜生山学園との統合を大学は提案しましたが、県民、市民の皆さんの理解がまったく得られず、あきらめるきっかけとなりました。ただ、それも、今思えば地域との関わり方を考える本当に良いきっかけになったのではないかと考えています。

その後、中でも山形ビエンナーレ、みちのおくの芸術祭というものを立ち上げたことは非常に意味を持っていると思います。それまで多くの日本で行われている芸術祭は地方自治体が開催し、資金を供出して著名なアーティストを招待し、芸術作品を展示するというものでした。大学はそれまで、大学をアートで満たそうとした大学美術館構想というものがありましたけど、その資金をこのビエンナーレに回して、自治体に頼らず独自の資金で開催することにしました。例えば横浜トリエンナーレという大きな芸術祭に比べると、100分の1とか200分の1くらいです。でも芸術や文化を信じる力が東北を再生するんだというふうに宣言して、山形県出身の荒井良二さんを芸術監督として、文翔館を中心に、大学が山といいますが丘の上から下りてきて、市内でさまざまなアートプロジェクトを展開しました。市民が直接体感でき、参加できる身近な芸術祭であり、地域に眠る文化を掘り起こす役割も担っていたと思います。多くのマスコミや行政からも、人口減少期に市街地に賑わいを取り戻したと評価をいただきました。

このような市民中心スタイルの芸術祭ができることが認知されて、日本各地に同様の芸術祭が始まったということ誇りにしています。上から、山から、丘から下りてくるということは大学にとってもう1つの意味を持ちます。それは地域全体をキャンパスにするということです。門もない、塀もない解放された大学ですけども、人々を迎え入れるだけでなく、教員も学生も大学の建物から出て、町中、社会の中、自然の中で課題に取り組んでいくという時代が来ていると思います。2年に1度行うビエンナーレ、今年は開催年度です。毎回新たなスタイルに挑戦してきましたけれども、今回は命、生命や健康や温泉に焦点を当てた大胆な提案をさせていただこうと計画しています。ご期待ください。

ビエンナーレと並んで大きなプロジェクトとしては、山形市より相談を受けていた旧山形市立第一小学校、山形まなび館の改修と活用法で、大学教員を中心としたチームが再建の中心となり、Q1という名の創造都市やまがたの拠点施設をオープンしました。文化や芸術の香りがする店舗や企業、施設が入居しています。町中ではシネマ通りも大学が関わった郁文堂の再生やとんがりビルのリノベーションや運営を始めて、町に少しずつ賑わいが戻ってきました。学生を町にというのも私たちの主張で、中心市街地の空き物件を学生の賃貸物件へとリノベーションできないかという取り組みをして、山形大学と共同で進めて、5件のビルでリノベーションが終わり、学生が入居しています。非常にイベント的なことを申し上げましたけれども、それよりも大学全体で多くの企業さんや自治体とコラボレーションをしている。年間数十件とかそういうものが展開されるようになったということが1番大学にとって大きなことではないかと考えています。

そうした中で、ここに今度はパンデミック、コロナ禍がやってきました。もうすぐ卒業式ですが、今回の学部、卒業する4年生は入学時に非常事態宣言があり、入学式が中止になった学年であります。それで当分の間、オンライン

で授業をすることになりました。オンラインで授業をどうすればいいか、学生も教員も苦悶する日々が続きましたが、大学に学生は来られないので、施設の使用に関わる費用を授業料より減免するという措置も行いました。ただ、授業が始まると、モニターをはさんで学生と教員の真剣なコミュニケーションがそこにはありました。インターネットが新たなコミュニケーションを生み出したのです。教員も学生もこの困難な時代を生き抜いたことが次の時代につながるきっかけになったのではないのでしょうか。

AIをはじめとするテクノロジーの進歩や目指すべきサステナブルな社会、押し寄せる人口減少といった社会の構造変化を認識して次の時代を考える必要が生じています。世界では国や民族の対立がとて深まり、隣国に侵略戦争を仕掛ける恐ろしい時代が始まりました。難民もあふれています。地球温暖化によるものでしょうか、気候変動の災害が世界で多発し、どうしたものかと思っているところに、日本では能登を激しい地震が襲いました。インフラの復旧が待たれていますが、政局は裏金問題です。どうなっているのでしょうか。この地では、東北の人口減少問題は待ったなしです。でもアイディアは欠如しています。このような危機的な時代、私たちは学生諸君に何を与え、何を期待すれば良いのでしょうか。今までは彼らが社会に出て生きがいのあるポジションを得、芸術やデザインの感覚を持ちながら幸せに暮らしていくことを願っていましたが、それは甘い考えに過ぎないのかもしれない。待ったなしのこの世の中に変化を与えるのは、若者の力しかありません。自分の身の回りだけを見ている人間ではなく、広く社会を見渡し、おおげさに言えば人類の未来に思いをはせるような学生を育てなければいけないと思っています。芸術家魂を持って世界を平和にする。芸術的創造と人類の良心によって科学技術を運用する。新しい世界観の確立を目指すという建学の理念に立ち返り、科学と芸術、デザインと芸術をいかに融合させるかが今後の課題となっていると思います。

スマートフォンがこれだけ普及するとは、少し前まで誰も思わなかったでしょう。AIを含む新たなテクノロジーは、近い未来、想像もつかない新しい世界を創出しましょう。芸術を志す者はデザイン思考、デジタルな感覚を取り入れ、デザインを志す者はアート思考、多面的に物を見て感覚を研ぎ澄ますことが必要となります。大学で学ぶものは両方の思考をものにして、社会の中で課題を解決する人材になるようカリキュラムを展開していかなければいけません。

この人口減の中で、自治体のできることは限りがあると思います。大学が単なる提携ではなくて文化財の保護や文化振興、新たな観光振興策などで市や県と連携し、大学が単なる連携のものを超えて公の役割と責任をこれから果たすという新たなスタイル、そういった概念を山形から日本中に発信していこうというふうに思っております。これからも地域の皆さん、山形の皆さんと運命共同体として力を合わせていく所存ですので、何卒よろしく願いいたします。

| 本日出席 (1 / 29) | 会員総数 | 出席会員数 |
|---------------|------|-------|
| | 101名 | 62名 |